

塩の魅力にとりつかれて

こんなに塩に個性があるなんて！見た目の色、形、大きさ、香り、もちろん味。塩は白いしょっぱい粉、と思っていたら大間違い。実に様々な個性があることに気づいたのは、2013年夏。宮城県石巻に旅行で訪れた際に、お土産屋さんで見つけた『伊達の旨塩』を試食し、なんて旨みがある塩なのだろうと感動して購入。自宅に戻って、家にある塩をすべて引っ張り出してみたところ、個性的な20種類以上の塩が目の前に。その時に思ったのが冒頭の感嘆の言葉だ。理系の学問で勉強し、製薬会社で開発職をしていた私がなぜ塩にハマっていったのか、塩の魅力とは何か、そして塩の専門店solcoを開店したこと、これからsolcoで伝えていきたいことなどをお話する。

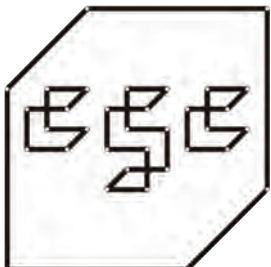
⇒つづきは市民研 HP で



Information

文京区にて「健康まちづくり」の創発を目指した事業をスタート

JST（独立行政法人 科学技術振興機構j）の「科学技術コミュニケーション推進事業 問題解決型科学技術コミュニケーション支援」の「ネットワーク形成型」平成27年度新規募集において、市民科学研究室の企画『「健康まちづくり」を創発する協働型市民フェスタ事業の推進』が採択されました。この7月から事業をスタートしています（支援機関は3カ年）。
本企画は、主担当を江間有沙（市民研・科学コミュニケーションツール研究会）、副担当を小林友依（市民研・食の総合科学研究会）が務め、東京都文京区を主たる対象にして、「地域」への関心、「科学」への関心、「健康」への関心を相互に関連付けて、地域の人々が健康に住む意識の向上を自然に創発できるようなモデル事業を推進します。地域のNPO、医療の専門家、行政・学校教育関係者、地元企業などが連携し、種々の調査活動、ワークショップ、対話型ゲーム、学術講座などを組み合わせて、最終的に「健康まちづくりフェスタ」（「地域ウォークラリー」と「地域サイエンスマップ・研究発表会」）に結実させる。それらのイベントを通して地域全体の健康への関心を高めるとともに、他地域への波及を可能にする、「健康まちづくり」の創発の手法を提示するものです。
次号から特設のページを設けて、進捗状況や広報や関連情報の紹介などを行っていきます。



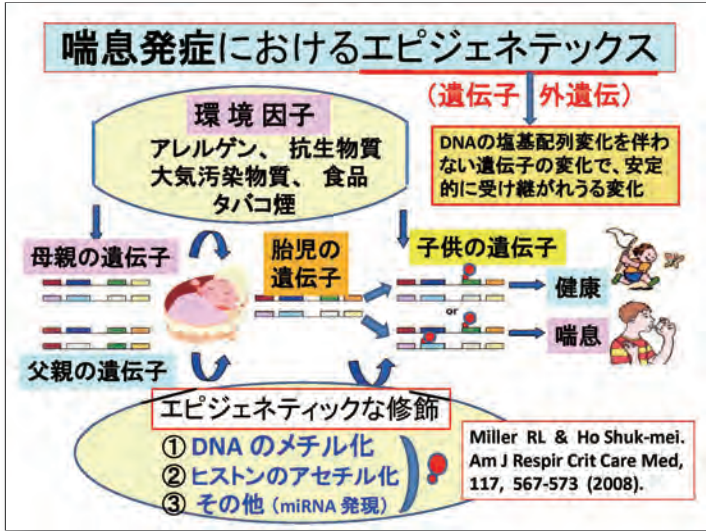
▲ST科学コミュニケーションセンター ロゴ

Article

呼吸器系疾患は減らせるか～大気汚染の変遷から読み解く～

近年、PM2.5をはじめとする大気汚染は徐々に改善している。しかし、気管支喘息患者は増え続けている。「こんなに増え続けるのはおかしい。大気汚染と喘息は関係ない」とする意見すら出ている。この意見は正しいのか。かつて四日市喘息事件後SO2汚染は劇的に改善されたのに、気管支喘息患者は劇的に増え続けた。それは何だったのか。また近年、喫煙率は低下しているのに肺がんは増え続けているという。なぜなのか。大気汚染との関連はどうか。他に肺がん増加の原因はないのか。この講座では、これら疾患の発症の仕組みと大気汚染の変遷を見ながらその真実に迫り、呼吸器系疾患を減らすために何が必要かを探った。

⇒つづきは市民研 HP で

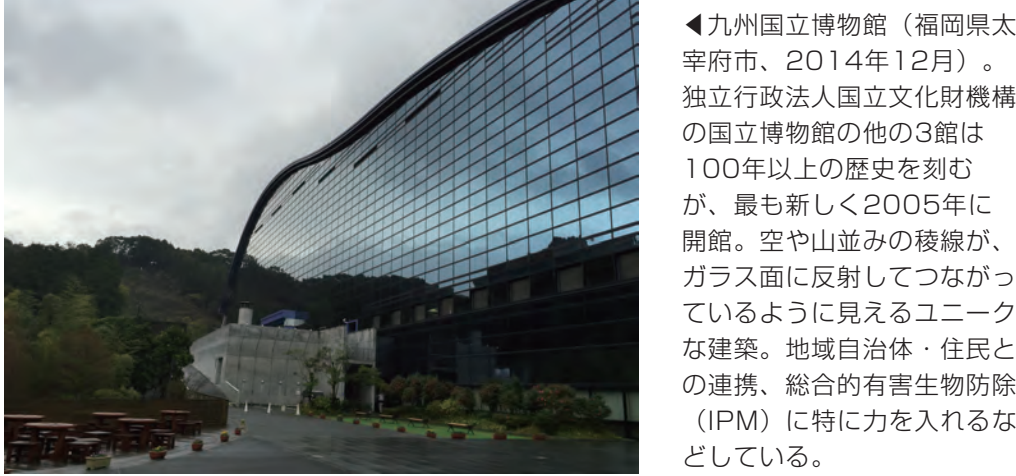


Article

連載 博物館と社会を考える 第 2 回

前回は、資料を持たない科学館が博物館かどうかを調べて、資料・標本などの「コレクション」があること（だけ）が重要というわけではなく、heritage（遺産）を扱うことこそが本質であるように認識されるようになりつつあること、美術館も歴史博物館も自然史博物館も、動物園や植物園も、資料を持たない科学館も博物館とされていることを確認しました。
美術館とギャラリー
実は、美術品を扱う施設の中にも永続的なコレクションを持たないものがあります。永続的なコレクションを持つ施設を美術館と呼び、他の美術館や個人所有者から一時的に借用して展示を行う施設をギャラリーと呼び言い方も確かにあります。なお、販売を主目的として、展示スペースも備えた商業施設もギャラリーと呼ばれますがここでは扱いません。

⇒つづきは市民研 HP で



Article

STAP 細胞事件は解決したのか―その検証を検証する(その 2)

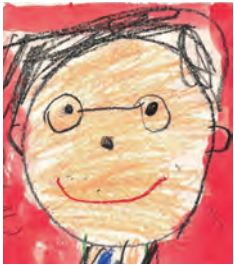
理研CDB（RIKEN Center for Developmental Biology）は、発生・再生科学総合研究センターから多細胞システム研究センターへと2014年11月に日本語名と組織を改めて再出発をすることとなった。2000年4月に政府によるミレニアムプロジェクトの一環として理研CDBが神戸ポートアイランドに開設されてから15年目の変革になる。
阪神・淡路大震災とバブル経済崩壊の二つ接点が、国債発行による公共投資の効果に期待する経済立て直し政府策の期待をこめて、神戸の新しい埋め立て地にCDB設立をもたらした。国債発行、すなわち借金による科学技術政策投資拡大の条件として語れたのが、ばらまきではない、トップダウンの集中投資と研究競争であった。
⇒つづきは市民研 HP で

Article

連載 学問へススメ～技術系営業マンの学位取得奮闘記～ 第 12 回(最終回) 特許を書こう

連載「学問へすすめ」も今回で最終回。12回に渡りお付き合いいただき読者の方々に感謝申し上げます。最終回は特許について書きたいと思う。昨年青色発光ダイオードでノーベル賞を受賞された中村修二先生（以下、中村さん）と当時所属されていた会社（日亜化学工業）との特許訴訟はマスコミにも大々的に取り上げられ多くの中村さんの著作にも紹介されている。中でも「真相・中村裁判（升永英俊、中村修二日著、経BP社、2002年）」は、読んでいて「そんな！ばかな！何てこった！あり得ない！」の連続で凄く面白かった。

⇒つづきは市民研 HP で



Article

レミングたちの行く手 Lemming, Whither are they going?

我々の住む世界には様々な分野で多岐に渡る問題がある。しかし、いかに細分化・専門化しようとも世界は一つであり、個々の事象はその一部を切り取っているに過ぎない。私は今や個々人が把握しきれなくなってしまった世界のカタチを私なりのやり方で論文として炙り出してみようと思い立った。それは三つの大きなくりで構成する。まずAは様々な資源に起因する諸問題について、Bは再生可能エネルギーの可能性、Cでは我々はどこに向かうべきかを考察する。以下はAの最後の項目としてあるが、全体を通して最火急に論じられるべき原子力に関する論考である。

もし、このまま続けば ～ If, it goes on ～

S F 作家アシモフの人気シリーズ『ファウンデーション』、それに限らず1950年代には超小型原子炉などの科学技術を駆使して強大な銀河帝国と渡り合う数多くの話が描かれ、将来を担う若い世代たちは科学技術の無限とも思える可能性に胸躍らせたものだった。そして原子力の平和利用が世界に拡がり、地球温暖化が世界規模で問題になってからは疑問を抱きつつも温暖化を食い止めるための必要悪としか思っていない人も多かったであろう。『あの日』までは。

⇒つづきは市民研 HP で

